

就学前障害児の保護者と支援者との情報交換に関する研究

著者	橋本 陽介
号	2
学位授与機関	Tohoku University
学位授与番号	教情博第23号
URL	http://hdl.handle.net/10097/59742

学 位 の 種 類	博士(教育情報学)
学 位 記 番 号	教情博 第 23 号
学位授与年月日	平成 25 年 3 月 27 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条 1 項該当
研 究 科 ・ 専 攻	東北大学大学院教育情報学教育部(博士課程後期 3 年の課程) 教育情報学専攻
学 位 論 文 題 目	就学前障害児の保護者と支援者との情報交換に関する研究
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 熊 井 正 之 教 授 渡 部 信 一 准教授 中 島 平

〈論文内容の要旨〉

この研究では、就学前障害児の保護者と、日中活動の場となる機関（以下、日中活動の場）に勤務する支援者との間の情報交換に関し、保護者が満足できる情報交換のモデルを提案し、その有効性を検証することを目的とした。その際、まず就学前障害児の保護者と日中活動の場の支援者との情報交換の現状ならびに保護者の情報交換に対する満足度（以下、交換満足度）に影響する要因を検討した。次に、就学前障害児の保護者と日中活動の場の支援者との情報交換に情報通信技術（以下、ICT）を活用することへの賛否ならびにその可能性を検討した。その上で、保護者と支援者のニーズを踏まえた情報交換モデルを提案し、その有効性を実験的ならびに実践的に検討した。

論文は 5 つの章から構成される。

第 1 章では、文献的検討によって、就学前障害児の保護者の交換満足度に関連する要因、日中活動の場の支援者と保護者との情報交換への ICT 活用に対する賛否は検討されていないこと、また、その有効性もほとんど検討されていないことなど、従来の研究の問題点を指摘した。

第 2 章では、まず、保護者と医療・保健・福祉・教育等の関係機関との情報交換に関する現状を質問紙によって調査し、保護者から見た情報交換先としての日中活動の場の位置づけを検討し

た。その結果、保護者にとって、通園施設、児童デイサービス、幼稚園、保育所、特別支援学校を含む学校といった日中活動の場は、一定の情報交換を行う機関に位置づいていた。そこで、保護者が実施する日中活動の場との情報交換について詳細な分析を行い、交換満足度に影響する要因を検討した。その結果、保護者の交換満足度の向上には、i) 情報交換の頻度の高さ、ii) 子どもの日常的な様子や変化に関する情報を基本的な内容とした情報交換の実施、iii) これら2条件に適した連絡ノートの使用、の3点が影響していると考えられた。これらを踏まえ、保護者の交換満足度を向上させるための取り組みについて言及した。また、先行研究の知見をもとに、連絡ノートを代替する情報交換の手段としてICTを活用することは、保護者の交換満足度の更なる向上につながると推察した。

第3章では、まず、就学前障害児の保護者と日中活動の場の支援者との情報交換にICTを活用するニーズを質問紙によって調査した。その結果、情報交換の手段としてICTを活用することに対し、支援者には比較的反対意見が多いものの保護者には賛成意見が多いことが明らかとなった。また、賛否や判断保留の理由とあわせて分析した結果、支援者が懸念する課題の解決が可能であれば、情報交換へのICT活用は保護者のニーズに応えるものと考えられた。加えて、保護者のニーズに応える情報交換へのICT活用は、保護者の交換満足度の向上にも効果が期待されると推察された。さらに、就学前障害児の保護者と日中活動の場の支援者の日常生活におけるICTの利用状況を検討した。その結果、保護者、支援者とも、7割以上が日常的にICTを利用している現状にあった。そのため、両者間の情報交換にICTを導入することは十分に可能であると考えられた。

第4章では、第2章、第3章の研究を踏まえ、情報交換への保護者の満足につながる情報交換モデルを提案し、その有効性を実験的、実践的に検討した。提案モデルでは連絡ノートを代替する手段として試験的にソーシャルネットワーキングサービス（以下、SNS）を活用した。これにより、第3章の研究で示した保護者のニーズと支援者の懸念課題に同時に対応可能となる。まず、提案モデルの有効性の実験的検討として、就学前障害児の保護者と支援者を対象に、連絡ノートとSNSのユーザビリティテストを実施した。その結果、子どもの日常的な様子に関する情報の記入・閲覧に関しては、SNSと連絡ノートのユーザビリティは同程度であることが確認された。次に、連絡ノートを使用した情報交換とSNSを使用した情報交換を就学前障害児の保護者と支援者の間で実践していただき、その効果等を比較検討した。その結果、連絡ノートを使用した情報交換に比べてSNSを使用した際の保護者の交換満足度が向上する場合があること、交換する情報量が増加すること等が確認された。SNSを使用した情報交換において保護者の交換満足度が向上した要因として、i) 交換される情報量の多さ、ii) 子どもの日常的な様子や変化に関する情報の獲得に対する要求への対応性、iii) 「お互いの実践やそれに基づく具体的支援方法」に関する情報の交換しやすさが考えられた。

第5章では、以上の結果を踏まえ、就学前障害児の保護者と支援者の情報交換の現状、情報交換への保護者の満足度関連要因、満足度向上につながる情報交換モデルについて考察するとともに、残された課題について述べた。

〈論文審査の結果の要旨〉

携帯電話、スマートフォン、電子メール、SNS等のICTの普及は、我々のコミュニケーション行動を多様化させ、情報発信・受信、情報交換、人間関係構築・維持・発展等にも新たな展開の可能性をもたらした。就学前障害児支援のための関係機関間・関係者間連携の基礎となる情報交換、すなわち支援関係機関（保育所、幼稚園、支援学校幼稚部、児童発達支援センター等）に勤務する支援者と児の保護者との情報交換も例外ではない。関係機関との情報交換に対する保護者の満足度の向上が児への保護者による適切な支援につながる事が知られており、満足度にかかわる要因や満足度向上の手立てについての研究は、就学前障害児支援研究における重要な課題のひとつである。しかし、保護者の情報交換への満足度にかかわる要因、ICTを利用した情報交換への賛否は未検討で、その有効性の検討も少ない。

本研究は、文献的検討によって従来の研究のこうした問題点を明確化したうえで、就学前障害児の保護者と支援者との情報交換の現状、情報交換への保護者の満足度にかかわる要因、ICTを利用した情報交換への賛否について調査・検討し、それらを踏まえて考案した情報交換モデルの有効性について実験的・実践的検討を加えたものである。

筆者は、まず、就学前障害児の保護者を対象に質問紙調査を実施した。日中活動の場やその他の関係機関（子ども発達センター等の療育専門機関、児童相談所等）の計13機関と保護者との情報交換頻度を確認した。続けて、保護者との情報交換において重要な位置づけにあった日中活動の場との情報交換満足度と、交換頻度、情報交換内容（家庭や園・学校での日常的な様子・変化、予定や出欠の確認など様々な連絡事項、お互いの実践やそれに基づく具体的支援方法、今後の進路選択に関する情報、地域の実情や制度・サービスに関する情報等の計13種類）とその交換程度、交換手段との関係を検討し、情報交換頻度、子どもの日常的な様子・変化に関する情報やそれに関連した実践・具体的支援方法、疑問、進路選択関連情報の交換程度、交換手段としての連絡ノートの使用が交換満足度にかかわる要因であると考えられることを示した。

次に、就学前障害児の保護者と日中活動の場に勤務する支援者を対象に質問紙調査を実施し、SNS等のICTの情報交換への利用に対する賛否とその理由を検討した。その結果、情報漏えい等への懸念、あるいは直接コミュニケーションの減少と関係の希薄化への懸念から判断を保留する

あるいは反対する支援者がいる一方で、便利さ、時間を気にしない情報交換の可能性、不足しがちな情報の迅速な入手を理由に多数の保護者が賛成していることが確認された。また、多くの保護者、支援者が、ウェブページ・ブログ等の閲覧、電子メールの受発信、SNS 参加だけでなく、高い安全性が要求される商品・サービスの購入、金融取引、インターネットオークションにも日常的に ICT を利用している現状が確認された。

以上の結果を踏まえ、筆者は、従来からの対面や電話と併せて SNS を用いて情報交換するモデルを提案し、実証的検討を加えている。筆者が利用を提案した SNS には「アルバム」、「日記」等の機能が実装され、保護者が許可して運営者が“招待”した特定の相手との情報交換が行えるよう設定された。これにより、保護者と支援者は、文字だけでなく必要に応じてデジタルカメラ等で撮影した写真を手軽に用いて子どもの日常的な様子・変化に関する情報やそれに関連した実践・具体的支援方法等の情報を交換することが可能になる。実証的検討として、筆者はまず、就学前障害児の保護者と支援者を被験者とする、連絡ノートと SNS のユーザビリティ確認実験を実施し、子どもの日常的な様子・変化に関する情報の交換(記入と閲覧)における SNS と連絡ノートのユーザビリティは同程度であることを示した。次に、就学前障害児の保護者と支援者の間での情報交換に、連絡ノートと SNS をそれぞれ一定期間使用いただき、情報交換頻度、交換情報量、情報の伝えやすさと理解しやすさ、交換満足度等を調査した。その結果、保護者の交換満足度は連絡ノート使用時より SNS 使用時において高くなる場合があること、交換する情報量は連絡ノート使用時より SNS 使用時で多いこと、SNS 使用時における保護者の交換満足度の高さには SNS で交換される情報量の多さや子どもの日常的な様子・変化に関する情報やそれに関連した実践・具体的支援方法に関する情報の SNS での交換しやすさが関係していると考えられること等を示した。

審査の結果、本研究が、タブレットパソコン等の他の ICT を利用した情報交換の検討、日中活動の場以外の関係機関に勤務する支援者との情報交換の検討等、いくつかの課題を残しながらも、a) 就学前障害児の保護者と日中活動の場の支援者間での情報交換に対する保護者の満足度に、情報交換頻度、児の日常的様子・変化に関する情報や具体的支援方法等に関する情報交換程度、連絡ノートの使用が関連していること、b) 支援者との情報交換に SNS 等の ICT を利用することを保護者は希望していること、c) 情報交換への ICT 利用に対して支援者が抱いている懸念を低減する方法があれば ICT 利用は可能であることを明らかにしたうえで、d) SNS を利用した情報交換モデルを実証的に検討した初めての試みであった点が高く評価された。

よって、本論文は博士（教育情報学）の学位論文として合格と認める。